

羅生門

芥川龍之介

青空文庫

或日あるひの暮方くしやうの事である。一人の下人しもべが、羅生門らしやうもんの下で雨やみを待つてゐた。

廣い門の下には、この男の外ほかに誰もゐない。唯、所々にぬり丹塗にぬりの剥むげた、大きな圓まる柱ばしらに、蟋きり蟀すが一匹とまつてゐる。羅生門らしやうもんが、朱雀すじやく大路おおぢにある以上いじやうは、この男の外ほかにも、雨あめやみをする市女いちめがさ笠がさや揉烏帽子もみかぶとが、もう二三人にんはありさうなものである。それが、この男の外ほかには誰もたれゐない。

何故なぜかと云ふと、この二三年、京都には、地震ぢしんとか辻風つじかぜとか火事かじとか饑饉うちくたとか云ふ災わざはひがつゞいて起つた。そこで洛中らくちゆうのさびれ方かたは一通りでない。舊記によると、佛像や佛具を打碎うちくだいて、そ

の丹にがついたり、金銀の箔はくがついたりした木を、路ぢばたにつみ重ねて、薪たきぎの料ししろに賣つてゐたと云ふ事である。洛中らくちゆうがその始末であるから、羅生門の修理しゆりなどは、元より誰も捨て、顧かへりる者がなかつた。するとその荒あれ果はてたのをよい事にして、狐こり狸りが棲すむ。盗ぬ人が棲すむ。とうとうしまひには、引ひ取り手てのない死人しにんとを、この門へ持つて來て、棄て、行くと云ふ習しふく慣わんさへ出來た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味きみを悪わるるが、この門の近き所じよへは足あしづみをしない事になつてしまつたのである。

その代り又鴉からすが何處どこからか、たくさん集つて來た。晝間ひるま見ると、その鴉なんばが何羽なんばとなく輪を描いて高い鷗尾しびのまはりを啼なきながら、飛びまはつてゐる。殊に門の上の空が、夕ゆふ燒やけであかくなる時ときに

は、それが胡麻ごまをまいたやうにはつきり見えた。鴉からすは、勿論、門の上にある死人しにんの肉を、啄みに來るのである。——尤も今日は、刻限こくげんが遅おそいせいにか、一羽も見えない。唯、所々ところどころ、崩れかゝつた、さうしてその崩れ目に長い草のはへた石段いしだんの上に、鴉からすの糞くそが、點々と白くこびりついてゐるのが見える。下人げにんは七段ある石段の一番上の段だんに洗あらひざらした紺こんの襖あをの尻しりを据ゑて、右の頬ほに出來た、大きな面皰にきびを氣にしながら、ぼんやり、雨あめのふるのを眺ながめてゐるのである。

作者さくしやはさつき、「下人が雨やみを待つてゐた」と書いた。しかし、下人げにんは、雨がやんでも格別かくべつどうしようとして云ふ當てはない。ふだんなら、勿論もちろん、主人の家へ歸る可き筈である。所ところがその主

人からは、四五日前に暇ひまを出だされた。前にも書いたやうに、當時たうじ京都きやうとの町は一通りならず衰微すいびしてゐた。今この下人が、永年ながねん、使はれてゐた主人から、暇ひまを出されたのも、この衰微の小さな餘波に外ならない。だから「下人が雨あめやみを待つてゐた」と云いふよりも、「雨にふりこめられた下人が、行き所ゆどころがなくて、途方にくれてゐた」と云ふ方が、適てきたう當である。その上、今日の空模様も少からずこの平安朝へいあんてうの下人の Sentimentalisme に影えいきやう響しした。申まをの刻下りからふり出した雨は、未あがに上るけしきがない。そこで、下人は、何を措さしいても差當さしたたり明日の暮くらしをどうにかしようとして——云はゞどうにもならない事ことを、どうにかしようとして、とりとめもない考かんがへをたどりながら、さつきから朱雀大路すじやくおほぢに

ふる雨の音を、聞くともなく聞いてゐた。

雨は、羅生門らしやうもんをつゝんで、遠くから、ざあつと云ふ音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した葺いらかき先に、重たくうす暗い雲を支へてゐる。

どうにもならない事を、どうにかする爲には、手段しゆだんを選んでゐるではない。選んでゐれば、築土ついでちの下か、道ばたの土の上で、いとま餓死うゑじにをするばかりである。さうして、この門の上へ持つて来て、いぬ犬のやうに棄すてられてしまふばかりである。選えらばないとすれば――
 一人の考へは、何なんど度も同じ道を低徊した揚句あげくに、やつとこの局所はうちやくへ逢着した。しかしこの「すれば」は、何時いつまでたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手しゆだん段を選ばないといふ事を

肯定こうていしながらも、この「すれば」のかたをつける爲に、當然たうぜん、その後に来る可ぬすびとき「盗人になるより外しかたに仕方がない」と云ふ事を、積極せきよくてき的に肯定する丈の、勇氣が出ずにゐたのである。

下人は、大きな嚏くさめをして、それから、大儀さうに立上つた。夕ゆ冷ふひえのする京都は、もう火桶ひをけが欲しい程の寒さである。風は門の柱はしらと柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗にぬりの柱にとまつてゐた蟋蟀きり／＼すも、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸をちゞめながら、山吹の汗衫かざみに重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまはりを見まはした。雨風あめかぜの患あはれのない、人目にかゝる惧おそのない、一晚樂ばんらくにねられさうな所があれば、そこでともかくも、夜よを明あかさうと思つたからである。すると、幸門の上の

樓へ上る、幅の廣い、之も丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がゐたにしても、どうせ死人ばかりである。下人は、そこで腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないやうに氣をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の樓の上へ出る、幅の廣い梯子の中段に、一人の男が、猫のやうに身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺つてゐた。樓の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしてゐる。短い鬚の中に、赤く膿を持った面皰のある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括つてゐた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を其處此

處と動かしてゐるらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々すみ／＼に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、ゆれながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない。

下人は、守宮やもりのやうに足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這ふやうにして上りつめた。さうして體からだを出來る丈、平にしなから、頸くびを出來る丈、前へ出して、恐る恐る、樓の内を覗のぞいて見た。

見ると、樓の内には、樽うはさに聞いた通り、幾つかの屍骸しがいが、無造作うさに棄て、あるが、火の光の及ぶ範圍はんゐが、思つたより狭いので、數かずは幾つともわからない。唯、おぼろげながら、知れるのは、そ

の中に裸はだかの屍骸しがいと、着物きものを着た屍骸とがあると云ふ事である。勿も
 論ちろん、中には女も男もまじつてゐるらしい。さうして、その屍骸
 は皆、それが、嘗、生きてゐた人間だと云ふ事實じじつさへ疑はれる程、
 土を捏ねて造つた人形にんぎやうのやうに、口を開あいたり手を延ばした
 りしてごろごろ床ゆかの上うへにころがつてゐた。しかも、肩とか胸むねとか
 の高くなつてゐる部分ぶぶんに、ぼんやりした火の光をうけて、低くな
 つてゐる部分の影を一層暗そうくらくしながら、永久に唾おしの如く黙だまつてい
 た。

下人は、それらの屍骸の腐爛ふらんした臭氣におひに思はず、鼻はなを掩おほつた。
 しかし、その手は、次の瞬しゆん間かんには、もう鼻を掩ふ事を忘れて
 ゐた。或る強い感かんじ情じやうが、殆悉この男の嗅覺を奪つてしまつた

からである。

下人の眼は、その時、はじめて、其屍骸そのしがいの中に蹲すまっている人間を見た。檜肌色ひはだいろの着物を著た、背の低い、瘦せた、白髪頭しらがあたまの、猿のやうな老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松まつの木片を持つて、その屍骸しがいの一つの顔を覗きこむやうに眺ながめてゐた。髪の毛の長い所を見ると、多分女たぶんんなの屍骸であらう。

下人は、六分の恐怖きやうふと四分の好奇心きしやとに動かされて、暫時は呼吸いきをするのさへ忘れてゐた。舊記きしやの記者の語を借りれば、「頭と身うしんの毛も太る」やうに感じたのである。すると、老婆らうばは、松の木片を、床板の間に挿さして、それから、今まで眺めてゐた屍骸の首くびに兩手りやうてをかけると、丁度、猿の親が猿の子しらみの虱しらみをとるやうに、

その長い髪かみの毛けを一本づゝ抜きはじめた。髪は手に従したがつて抜けるらしい。

その髪かみの毛けが、一本づゝ抜ぬけるのに従したがつて下人こころの心こころからは、恐怖こぼが少しづつ消きえて行いつた。さうして、それと同時どうじに、この老婆らうばに對するはげしい憎悪ぞうをが、少しづゝ動ういて來た。——いや、この老婆らうばに對すると云いつては、語弊ごへいがあるかも知れない。寧な、あらゆる悪あくに對する反感はんかんが、一分毎いちぶんごとに強つよさを増まして來たのである。この時とき、誰たれかがこの下人したごに、さつき門もんの下したでこの男おとこが考かんがへてゐた、饑死うゑじをするか盗人たうじんになるかと云いふ問題を、改あらためて持出もちだしたら、恐おそらく下人したごは、何なにの未練みれんもなく、饑死うゑじを選えらんだ事ことであらう。それほど、この男おとこの悪あくを憎にくむ心こころは、老婆らうばの床ゆかに挿さした松まつの木片こけのやう

に、勢よく燃え上り出してゐたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつた。従つて、合理的には、それを善惡の何れに片づけてよいか知らなかつた。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云ふ事が、それ丈で既に許す可らざる惡であつた。勿論、下人は、さつき迄自分が、盗人になる氣でゐた事などは、とうに忘れてゐるのである。

そこで、下人は、兩足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上つた。さうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股おまたに老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは、云ふ迄もない。老婆は、一目下人を見ると、まるで弩いしゆみにでも弾かれたやうに、

飛び上つた。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が屍骸しがいにつまづきながら、慌あはてふためいて逃げようとする行手を塞いで、こう罵ののつた。老婆は、それでも下人をつきのけて行かうとする。下人は又、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は屍骸しがいの中で、暫むごん、無言のまゝ、つかみ合つた。しかし勝しょう敗はいは、はじめから、わかっている。下人はとうとう、老婆の腕うでをつかんで、無理にそこへねぢ倒たほした。丁度、鶏とりの脚のやうな、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしてゐた。さあ何をしてゐた。云へ。云はぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を拂つて、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙つてゐる。兩手をわなわなふるはせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出さうになる程、見開いて、唾のやうに執拗く黙つてゐる。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されてゐると云ふ事を意識した。さうして、この意識は、今まではげしく燃えてゐた憎惡の心を何時の間にか冷ましてしまった。後に残つたのは、唯、或仕事をして、それが圓満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し聲を柔げてかう云つた。

「己は檢非違使の廳の役人などではない。今し方この門の下を通りかゝつた旅の者だ。だからお前に繩をかけて、どうしよう云ふやうな事はない。唯、今時分、この門の上で、何をして居ただか、それを己に話しさへすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いてゐた眼を、一層大きくして、ぢつとその下人の顔を見守つた。眶の赤くなつた、肉食鳥のやうな、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、殆、鼻と一つになつた唇を、何か物でも嚙んでゐるやうに動かした。細い喉で、尖つた喉の動いてゐるのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くやうな聲が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ傳はつて來た。

「この髪を抜いてな、この女の髪を抜いてな、鬢にせうと思つた

のぢや。」

下人は、老婆の答が存外、平凡へいほんなのに失望した。さうして失望つぼうすると同時に、又前の憎悪が、冷な侮蔑ぶべつと一しよに、心の中へはいつて來た。すると、その氣色けしきが、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手かたてに、まだ屍骸の頭から奪とつた長い抜け毛もを持つたなり、墓ひきのつぶやくやうな聲で、口ごもりながら、こんな事を云つた。

成程、死人の髪かみの毛けを抜くと云ふ事は、悪い事かも知れぬ。しかし、かう云ふ死人の多くは、皆、その位ことな事を、されてもいゝ人間にんげんばかりである。現に、自分が今、髪かみを抜いた女などは、蛇へびを四寸ばかりづゝに切きつて干したのを、干魚ほしうをだと云つて、太刀たて

帶はきの陣へ賣りに行つた。疫病にかゝつて死ななかつたなら、今でも賣りに行つてゐたかもしれない。しかも、この女の賣をんなる干魚は、味あぢがよいと云ふので、太刀帶たちが、缺かさず菜料さいれうに買つてゐたのである。自分は、この女のした事が悪いわるとは思はない。しなければ、饑死うゑじにをするので、仕方しかたがなくした事だからである。だから、又今、自分じぶんのしてゐた事も悪い事とは思はない。これもやはりしなければ、饑死うゑじにをするので、仕方がなくする事だからである。さうして、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、自分のする事を許ゆるしてくれるのにちがひないと思おもふからである。

——老婆は、大體こんな意味の事を云つた。

下人は、太刀を鞘さやにおさめて、その太刀の柄ひだりを左の手でおさへ

ながら、冷然として、この話を聞いてゐた。勿論、右の手では、赤く頬ほに膿うみを持つた大きな面皰めんぽを氣きにしながら、聞いてゐるのである。しかし、之を聞きいてゐる中に、下人の心には、或ある勇氣ゆうきが生まれて來た。それは、さつき、門もんの下したでこの男に缺けてゐた勇氣である。さうして、又またさつき、この門の上うへへ上あがつて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全ぜん然ぜん、反對たいごな方向ほう向に動うごかうとする勇氣である。下人は、餓死うゑじをするか盜ぬす人びとになるかに迷はなかつたばかりではない。その時ときのこの男の心もちから云へば、餓死うゑじなどと云ふ事は、殆かん、考かんへる事さへ出來ない程、意識の外に追ひ出されてゐた。

「きつと、そうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな聲で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に、右の手を面炮から離して、老婆の襟上をつかみながら、かう云つた。

「では、己が引剥をしようと思ひまいな。己もさうしなければ、餓死をする體なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く屍骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を數へるばかりである。下人は、剥ぎとつた檜肌色の着物をわきにかゝへて、またゝく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

暫、死んだやうに倒れてゐた老婆が、屍骸の中から、その裸の

體を起したのは、それから間もなくの事である。老婆は、つぶやくやうな、うめくやうな聲を立てながら、まだ燃えてゐる火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。さうして、そこから、短い白髪しらがを倒にして、門の下を覗のぞきこんだ。外には、唯、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人は、既に、雨あめを冒をかして、京都の町へ強盜を働はたらきに急いでゐた。

——四年九月——

青空文庫情報

底本：「新選 名著復刻全集 近代文学館 芥川龍之介著 羅生門 阿蘭陀書房版」ほるぷ出版

1976（昭和51）年4月1日発行

※疑問点の確認にあたっては、「日本の文学33 羅生門」ほるぷ出版、1984（昭和59）年8月1日初版第1刷発行を参照しました。

入力：j.utiyama

校正：もりみつじゅんじ、野口英司

1999年6月9日公開

2010年11月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

羅生門

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>